

第5章 ま と め

第1節 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡

坂 井 隆

元総社寺田遺跡（前橋市元総社町）の牛池川旧河道より2面、および下高瀬上之原遺跡（富岡市下高瀬 当事業図調査で現在報告書編集中）13号竪穴住居より1面、八稜鏡が発見された。これらの鏡の特徴と出土状態を見ると共に、出土の意味を考えたい。

1. 出土鏡の状態

A—1 元総社寺田0372八稜鏡

直径推定7.4cm、内区径5.4cm、縁厚1mm、鈕厚4mm、重量7gを測る。外区の3分の2が欠損している。鏡背面は、かなり摩耗しており、薄く軽い。縁形は蒲鉾式細縁、界圏は単圏細線、鈕形は円錐形素鈕である。

文様は摩耗が激しいが、外区は飛雲文である。内区は、左右均整に開く瑞花が90度の位置で3箇所見られるため、単純な瑞花文と考えられる。

文様の形状と大きさは、日光男体山山頂出土の瑞花文八稜鏡（文献15のNo93～102）に近似している。牛池川旧河道の6世紀の榛名山火山灰層よりは上層で出土したが、近世までの遺物が混在する層位だった。

A—2 元総社寺田0373八稜鏡

直径7.4cm、内区径5.2cm、縁厚2mm、鈕厚4mm、重量39gを測る。完存品であり、縁は研磨されている。鏡背面は、3分の2ほどのところで文様に大きく精粗の差が見られる。

縁形は堤塘式縁、界圏は単圏細線、鈕形は截頭円錐形素鈕である。文様は粗面部分がはっきりしないが、外区が飛雲文、内区は一对の唐草文のうち片側

のみが明瞭である。

文様の形状と大きさは、赤城山小沼出土鏡の中（文献12のNo85）に近似したものが見られる。精粗两部分で異なった鑄型より造られた可能性が考えられる。

0372鏡と同様の層位の牛池川旧河道で、約20m離れて発見された。

B 下高瀬上之原八稜鏡

直径推定7.6cm、内区径5.3cm、縁厚1.5mm、鈕厚4mm、重量15gを測る。外区の5分の3ほどが欠損している。凹面鏡で、鈕には革紐状の繊維が残っている。幅広い縁は摩耗している。鏡背面は、全体に文様の残存状態が悪く、踏み返し鑄造と考えられる。

縁形は蒲鉾式膨側高縁、界圏は単圏細線、鈕形は截頭円錐形素鈕である。文様は不明確な部分が多いが、外区が飛雲文、内区は向かい合った文様にそれぞれ類似した瑞花と鳥のようなものが認められる。そのため瑞花双鳥文系のものと思われる。

文様の形状と大きさは、貫前神社蔵鏡の中（文献12のNo89）に近いものが見られる。

竪穴住居の北壁近くの床より20cmの位置で発見された。すぐ近くで他に鉄刀子・鉄帶金具・銅鈴が出土している。この住居は、土器の年代は8世紀中頃より9世紀初頭までの幅に入ると考えられる。しかし土層状態より、この住居の廃絶後のものになる。

2 時期と出土状態の特徴

以上の3面は、いずれも直径7.5cm前後の小型鏡で、文様は瑞花双鳥鏡の系統をひくものである。しかし唐式鏡からの双鳥系の文様構成がかるうじて認めら

第1節 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡

れる上之原鏡に比べて、元総社寺田の2鏡はかなりそこから自由になった文様の様相である。

また上之原鏡と寺田0372鏡は極めて薄く、文様の摩耗も含めて、保存状態の問題もあるが、あまり丁寧な鑄造がなされたとは考えにくい。寺田0373鏡は、厚さなどはしっかりしている。しかし、明らかに2個の異なった鑄型が使われており、粗製の部分の方は技術的にかなり安易になされている。

瑞花双鳥系の八稜鏡は、日光男体山山頂遺跡出土の134面の鏡の中で、117面含まれている。そしてその中で寺田0372鏡に似た瑞花八稜鏡は、26面（直径7.1～9cm）見られる。この瑞花双鳥系八稜鏡は、永延2（988）年から永保2（1082）年までのいくつかの紀年銘鏡が知られている（文献7）が、永延2年や寛弘4（1007）年と比べて、寺田0372鏡と0373鏡は後出と考えられるため、11世紀後半代をあてるのが、現状では妥当であろう。

上之原鏡は、踏み返し鑄造のために文様が明瞭ではないが、もとの鏡はかなり典型的な瑞花双鳥文鏡である可能性はある。とすれば、鏡の年代は10世紀後半とすることができる。しかし住居そのものの年代は、9世紀初頭を下ることは考えにくい。従って、この住居の廃絶後150年もたってから埋納されたものとせざるをえない。

管見では、遺跡出土で年代の推定できる最も古い可能性の瑞花双鳥系八稜鏡は、10世紀後半の長野県松本市吉田川西遺跡（文献26）と同原村判ノ木沢西遺跡（文献25）のものがある。両者に比べ上之原鏡は、縁がかなり狭く低い。高く厚い唐式鏡の縁からの発達を考えるなら、上之原鏡は上記2例より古くすることは難しく、150年後の埋納を裏付ける。なお長野県茅野市の構井・阿弥陀堂遺跡の例は、「竪穴住居址が埋没していく過程の窪地に鏡が置かれていた」としており（文献22）、同様のことが考えられる。

元総社寺田鏡は、2例ともに西側に接する上野国総社神社に奉納されたものと考えるのが妥当である。そしてこれは、牛池川への献納と共に、総社神社本殿の北側に東西方向に延びる堀へ献納されたものが、

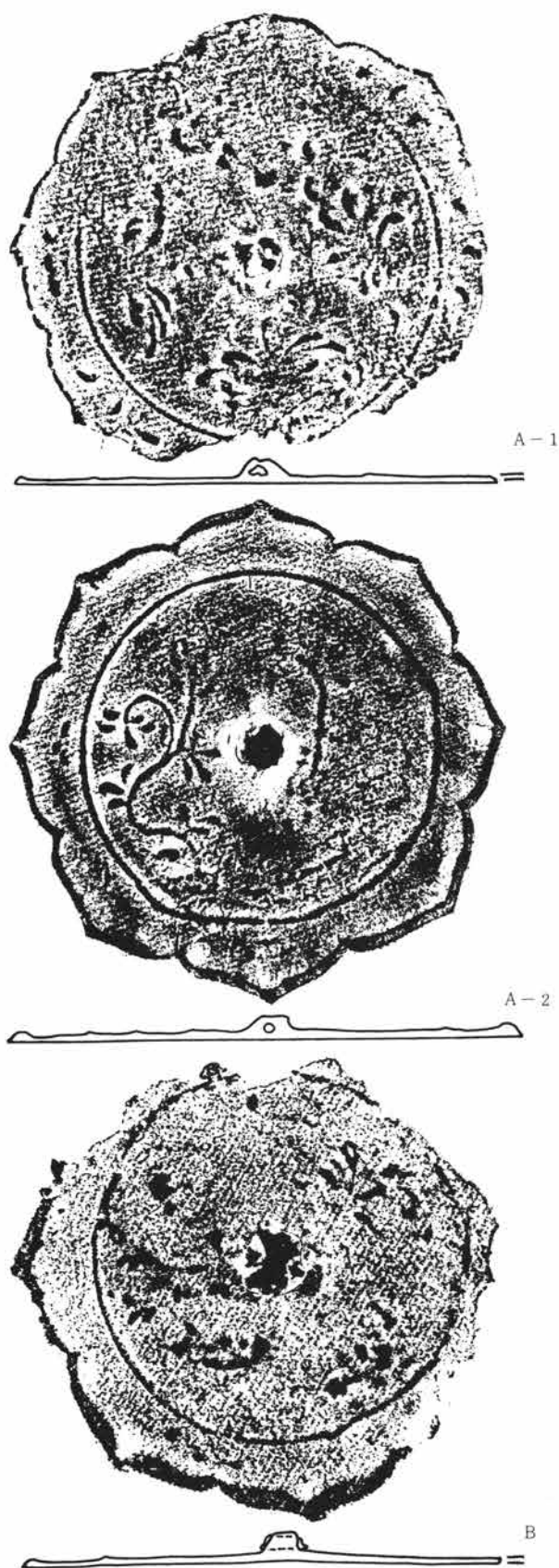


図139 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡

洪水などにより水流の通じる牛池川へ流れこんだ可能性も想定しうる。他の出土例では、後述のように八稜鏡の溝への埋納として長野県茅野市構井・阿弥陀堂遺跡の例及び大阪府和泉大津市大園遺跡と福岡市飯森遺跡群例もある(文献7による)が、よく知られているような赤城山小沼や羽黒山鏡ヶ池のような信仰対象地での池中埋納として、総社神社本殿北側の堀への埋納も十分想定できるからである。

下高瀬上之原鏡は、同様の出土状態で共伴した鉄刀子・鉄帯金具・銅鈴との組み合わせは、日光男体山などの自然対象への埋納と同様であり、また後述のように似た組み合わせの金属製品がいくつかの竪穴住居出土鏡の例と共伴している。そして前述のような年代観より見るならば、竪穴住居の生活そのものとは無関係に、埋納されたと考えられる。高瀬丘陵上のこの遺跡からは、北西2kmに上野国一之宮の貫前神社を望むだけでなく、南西には同神社の神体の一つである稲含山がそびえ、北東方向にははるかに赤城山がのぞめる。つまり、直接には貫前神社の信仰体系の中での埋納と考えられる。

なお、かつて尾崎喜左雄は、赤城山と稲含山を結んだ線上に榛名山から垂線をおろした位置に前橋市元総社町の総社神社があたり、ここへの国府設定に関係があると述べた。(文献6)その当否は別として、

祭祀中心	出土鏡	伝世鏡
A 一之宮貫前神社	本宿遺跡2面 下高瀬上之原遺跡1面	貫前神社3面(他に唐式鏡1面)
B 赤城山	赤城山山頂小沼4面 書上上原之城遺跡1面	三夜沢赤城神社1面 産泰神社1面 二之宮町個人1面
C 国府・総社地域	元総社寺田遺跡2面 鳥羽遺跡2面 正観寺遺跡1面 天田・川押遺跡1面 下大類遺跡1面	
D 榛名山	糺屋遺跡1面	(榛名神社1面)
E 神流川谷		旧鏡守神社1面 野栗神社1面

今回の発見は、各点での八稜鏡出土を示した。

3 鏡の竪穴埋納と八稜鏡の性格をめぐって

3-A 上野国内の分布と出土状態

筆者はかつて、伊勢崎市書上上原之城遺跡掘立遺構出土の瑞花双鳥八稜鏡をめぐって、全国的な八稜鏡(和鏡の初現的な存在である瑞花双鳥文系の八稜鏡及びその亜種を指す。以下同じ)の出土状態を考えたことがある。(文献10)その時点で把握できた上野国内での八稜鏡は、出土鏡7遺跡12面、伝世鏡7箇所9面である。出土鏡は、今回の2遺跡3面と渋川市の糺屋遺跡1面を下記表より除いたものがそれである。伝世鏡は、宮城村三夜沢赤城神社1面、前橋市産泰神社1面、同二之宮町個人1面、富岡市貫前神社3面、鬼石町譲原旧鏡守神社1面、上野村新羽野栗神社1面、個人1面。その他に唐式鏡の八稜の白銅月宮鑑が貫前神社に、また瑞花双鳥系八稜鏡と同時期のものとして双鳳麒麟八花鏡が榛名町の榛名神社に伝世され、同じく唐草四花鏡が大泉町坂田字熊野出土(詳細不明)とされている。(文献12)

今回の発見により、出土鏡は10遺跡16面となった。これらの分布は、次のように極めて興味深い特徴を

F 不明

示している。

Aでは、本宿は貫前神社の直下の遺跡であり、下高瀬上之原は上述のように貫前神社と神体山の稻舎山を望む位置である。Bでは、対象地が山頂小沼・三夜沢赤城神社・二之宮赤城神社(書上上原之城は二之宮赤城神社の南東6km)・産泰神社(二之宮赤城神社の北北東2km)に別れるが、赤城山信仰が共通している。Cは、総社神社からの距離が、鳥羽(南西1.5km)、正観寺(南西2.5km)、天田・川押(南5.5km)、下大類(南南東8km)であり、前3者は古道により、下大類は牛池川により、総社に通じている。(文献16)以上の各例の八稜鏡が、それぞれ祭祀中心とした信仰対象に献納した、あるいはする予定であったとするのは、ほぼ誤りないであろう。下高瀬上之原は、前

個人1面

(大泉町1面)

述のように廃棄竪穴を埋納場所として使っていたが、竪穴出土の他の本宿、鳥羽、正観寺、天田・川押例は、竪穴居住者との関係は近いと思われる。Dの糺屋は、伊香保神社里宮三宮神社の北4kmである。

Eは、上武国境の山深く狭い神流川の谷のそれほど著名ではない神社である。しかし、谷筋を通る十石街道は、信濃佐久へのルートとして中世には開かれていた。ここでなんらかの鏡を使った祭祀が行われていたとするより、鏡を持って移動する人々が通った場所と考えたい。

3-B 竪穴から出土した鏡の意味

竪穴住居より出土した鏡は、管見で次のとおりである。

種類	遺跡名	遺構	出土鏡	出土状態	共伴遺物	年代	文献
I 唐式鏡類及び儀鏡							
1	石川県羽咋市寺家遺跡	竪穴SBT12	儀鏡1			8C前	1, 3
2	同上	竪穴SBT16	海獣葡萄鏡1 儀鏡1	竪穴廃棄後埋納		8C前	1, 3
3	同上	竪穴SBT19	儀鏡1	床面	帯金具	8C前	1, 3
4	同上	竪穴SBT23	海獣葡萄鏡片1	床面		8C前	1, 3
5	同上	竪穴SBT28	儀鏡1			8C前	1, 3
6	同上	掘立SB21	海獣葡萄鏡1 儀鏡1			8C前	1, 3
7	同金沢市戸水C遺跡	12号掘立	唐式円鏡片1	周辺	緑釉・灰釉	9, 10C	2
8	京都府長岡京市長岡京跡	掘立SB5303	四仙騎獣文八稜鏡1	掘り方		8C末	23
9	千葉県千葉市文六第2遺跡	A005号住	狻猊双鸞八花鏡1	床面近く		平安中	4
10	群馬県榛東村別分八幡下遺跡	2区5号住	小型儀鏡1	床より10cm	土器	9C前	18
11	同群馬町鳥羽遺跡	G38号住	唐花?八稜鏡片	中央部床面	土器	10C後	9
II 八稜鏡							
12	群馬県群馬町鳥羽遺跡	N1号住	唐草文八稜鏡1	床より17cm	土器・灰釉	11C	11
13	同高崎市正観寺遺跡	72号住	草花八稜鏡片1	中央床	帯金具鎌鏃	11C後	19
14	同天田・川押遺跡	52号住	瑞花双鳳八稜鏡1	床面直上	土器	11C前	20
15	同下大類遺跡	竪穴住居	瑞花双鳥八稜鏡			11C頃	21
16	同富岡市本宿遺跡	MT127号住	八稜鏡片1	覆土	土器	11C	23
17	同伊勢崎市書上上原之城遺跡	掘立建物	瑞花双鳥八稜鏡1			11C?	10
18	同渋川市糺屋遺跡	2号住	瑞花双鳳八稜鏡片1		土器	10, 11C	17
19	山梨県御坂町二之宮遺跡	83号住	瑞花八稜鏡1		土器	11C前	36
20	長野県茅野市判ノ木山西遺跡	14号住	八稜鏡片2		土器灰釉鎌鏃	10C後	25
21	同構井・阿弥陀堂遺跡	30号住	瑞花双鳥八稜鏡3	廃棄後埋納	土器	不明	22
22	同松本市南栗遺跡	SB91	八稜鏡片1	置かれた状態	灰釉鎌刀子	11C前	27
23	同栄村栗落遺跡	竪穴住居	瑞花双鳥八稜鏡1	床面上	土器灰釉鉄棒	10C末11C	8
24	同箕輪町大原第二遺跡	1号住	八稜鏡1	床上10cm	灰釉	10C後11C前	35
25	福島県郡山市馬場中路遺跡	4号住	瑞花双鳥八稜鏡1	ピット中		11C初	13
III 和鏡円鏡							
26	長野県長野市浅川西条遺跡	15号住	網代地草鳥鏡1	覆土最上層		平安	29
27	同松本市北栗遺跡	SB261	松鶴鏡1		やりがんな馬歯	12C後以降	28

以上の他に、人為的な施設より出土した八稜鏡には、次のものがある。

第5章 ま と め

28	千葉県市原市上総国分尼寺	土坑墓	瑞花双鳳八稜鏡 1	鉄製品鈴	11, 12C	7
29	長野県塩尻市吉田川西遺跡	土坑墓SK128	瑞花双鳥八稜鏡 1	漆器緑釉土器	10C後	26
30	同松本市南栗遺跡	土坑墓SK176	瑞花双鳳八稜鏡 1		11C後	27
31	同茅野市構井・阿弥陀堂遺跡	溝 2	瑞花双鳥八稜鏡 1	鉄製品	10C後11C前	22
32	同奈川村金原遺跡	土坑墓	八稜鏡 1	灰釉	10C末11C前	34
33	三重県明和町斎宮跡	土坑墓SK3084	瑞花双鳥八稜鏡片 1		平安中期	14
34	大阪府枚方市九頭神遺跡	土坑墓	瑞花双鳳八稜鏡 1		11C初	37
35	同和泉大津市大園遺跡	大溝	瑞花双鸞八稜鏡		11C末12C前	7
36	福岡県福岡市飯森遺跡群	溝	八稜鏡片 1		10, 11C	33
37	同春日市門田遺跡	木棺墓	花枝鳥文八稜鏡	鉄紡錘車釘	10C後	32

それらの中で、堅穴住居からの例で層位的な出土状態が知られるものは、次のように分けられる。

- A 廃絶後の埋納：寺家 SBT16、別分八幡下、鳥羽N 1 住、本宿、構井・阿弥陀堂30号住、大原第二、浅川西条、北栗(鉄馬歯)
- B 廃絶時に存在：天田・川押、文六第 2、乗落(スラグ)、馬場中路
- C 出土状態不明で鉄製品共伴：正観寺片、判ノ木山西片、南栗 SB91片(置かれた状態)

Aの中で最も古い寺家 SBT16の場合、廃棄した大型堅穴に砂そして粘土を入れ、それから鏡を埋納した後に、火を燃やしている。(文献 1) 構井・阿弥陀堂30号住では、覆土第 2 層上面で12×9 cmの板の上に載った状態で 3 面が見られた。「自然堆積していく過程においてできた窪地内におかれた」と報告者は述べ、同遺跡の溝 2 出土例(鉄製品を伴う)との関係で、4 m離れた溝 4 の埋没に伴う埋納としている。確かに、溝などへの埋納は他に上記の35と36で見られる他に、海獣葡萄鏡では平城京などにも例がある。北栗例は、同じく覆土中に鉄製品と馬歯があった。馬歯は、寺家の堅穴 SBT29でも覆土中で出土している。

堅穴住居の廃絶に対する儀礼として、鏡を鉄製品あるいは時には馬歯と共に埋納することは、どうやら海獣葡萄鏡の段階から始まり、八稜鏡で盛んに行われ、和鏡円鏡の時まで及んでいたようである。

Cはいずれも破片であり、必ずしもAと同様ではないかもしれないが、鉄製品を共伴する例が 3 例あるのも興味深い。これらの鉄製品とは、上記のように帯金具・鎌・鋏・刀子・棒などである。南栗 SB391については、AあるいはBのいずれも考えられる。

Bは、堅穴廃絶時の初期埋没に際し、すでに確實

に床などにあったものである。馬場中路を除いて、突発的な事態のために遺棄されたとしか考えられない。馬場中路は、径16cm深さ20cmのピット内からの出土である。このピットは柱穴の可能性もあり、とすれば地鎮具であるかもしれない。

そのため、馬場中路を唯一の例外として、堅穴から出土した鏡は、下高瀬上之原のように居住時間と大きく隔たりのない限り、廃絶儀礼に伴うものと、最終使用の前に遺棄されたものととらえられる。

この点について堅穴出土の鏡を、全般的に遺棄とした前説は撤回する。なお、横山貴広は海獣葡萄鏡の出土状態の検討の中で、①「埋納」と②「投供」に分けて考えている。(文献 3) 即ち、①「埋納」とは、「信仰対象にたいする鎮め物的な意味あいを有して」おり、「埋納されたその物に留まる使命を帯びる」行為とし、法隆寺五重塔心礎などの 7 例をあげている。一方、②「投供」とは、「鏡自体に祭祀の目的(願=厄落としなど)をこめて捨て去る身代わりの性格を有」し、「捨て去ることによってその使命をすべて終了」する行為とし、寺家遺跡の堅穴での海獣葡萄鏡のあり方を含めて、7 例を指摘した。特に、後者はいわば「使い捨て」であるため、使われた鏡はすべて日本製の小形雑鏡であることがその証拠と述べた。興味深い指摘であるが、はたして上述の八稜鏡や和鏡円鏡による堅穴の廃絶儀礼に伴う埋納が、横山の言う海獣葡萄鏡の「投供」に完全に一致するとは、言い難い。例えば構井・阿弥陀堂30号住の場合、3 面が板に載せられた状態であった。それは「使い捨て」とは考えにくく、むしろ「埋納」であると思われる。八稜鏡や和鏡円鏡の場合は、破片のみも含めて恐らく大部分が海獣葡萄鏡の「埋納」でないと思われる。

特に八稜鏡は、出土鏡の大部分(1987年での管見では全193面の85%)が、日光男体山を中心とする自然の信仰対象地で発見されている。男体山山頂を中心とする霊地でのあり方は、その前提に登山という苦行的な行為を伴っており、供献者の「身代わり」ではあっても「使い捨て」られたものとは、考えにくい。そして自然対象地で発見された鏡と堅穴などで出土したものとの質の差は、海獣葡萄鏡のように区別されない。

逆に、男体山の134面以上の出土鏡の中に僅か1面ながら古い漢式鏡も入っていたこと、そして大部分を占める瑞花双鳥系の八稜鏡の文様はかなり精粗があることを見れば、鏡背の文様は供献者にとってあまり大きな意味ではなかったかと思われる。「埋納」することが、最初からの製作目的であり、例えば化粧具としての使用などはあまり考えられなかったのではないだろうか。上記の吉田川西など、いくつかの土坑墓での出土も見られる。しかし、それは弥生時代以来続いている慣行であり、直接化粧具としての実用を現すことではない。(菊池誠一は化粧具としての使用の証拠として『義経記』をあげているが、それは八稜鏡の年代よりは1世紀以上後の資料である。文献7)

3-C 八稜鏡の分布の特徴

以上のような分布とそれ以外の鏡出土例をもとに菊池は、鏡を出土した集落遺跡の種類を1「山麓や地域内の高所にある規模の小さな遺跡」、2「低地や扇状地にある規模の小さな遺跡」、3「台地・低地に立

地し、付近に国府・国分寺・有力社寺などがあり、その地域の政治・文化の中心地域にある大規模な遺跡」に分けた。そして1と2は「鏡を祭祀に使う呪術的宗教者の存在」を考えた。3は、「有力者層の(中略)私的所有物としての化粧道具」と「呪術的宗教者」の祭祀品との二つの可能性を併記している。

さらに「東日本での鏡の集落内出現は、(中略)住居からの出土は10世紀後半頃から始まり、全国的に拡散するのは11世紀段階であろう。そして、それは京の文化をいち早く受容することができた国庁・国分寺近辺の集落で始まったとみることができる。そして、山間部への波及も同時に行われたのであろう。」と述べている。(文献7)

かつて検討したように、八稜鏡はその出土の大部分(1987年の管見で193面の83%の160面)が栃木・群馬・長野の3県に偏っている。もちろんそれは、日光男体山山頂の134面の量の圧倒によるものだが、さらに山梨や福島あるいは石川の白山を加えた東日本内陸部(東山道地域と周辺)での絶対的な出土量の優位は、その後の資料増加でも続いている。

さらに前述のように、上野国内の出土・伝世の各資料は、基本的に有力神社(山を神体とする式内社と中世の某之宮呼称を残す神社そして国府の総社)また交通路上に見られる。それは、集落の規模などとは直接関係ない。

上記の上野以外の各例は、立地的には次のように特徴づけられる。

A 有力神社・山岳信仰地近傍

二之宮	： 甲斐国二之宮美和神社近傍
判ノ木山西、構井・阿弥陀堂	： 信濃国一之宮諏訪大社近傍
南栗、吉田川西、(北栗)	： 同 三之宮砂田神社近傍
大原第二	： 木曾駒ヶ岳近傍か
(浅川西条)	： 飯縄山近傍
上総国分尼寺	： (上総国総社)

B 交通路

馬場中路	： 阿武隈川近傍か
------	-----------

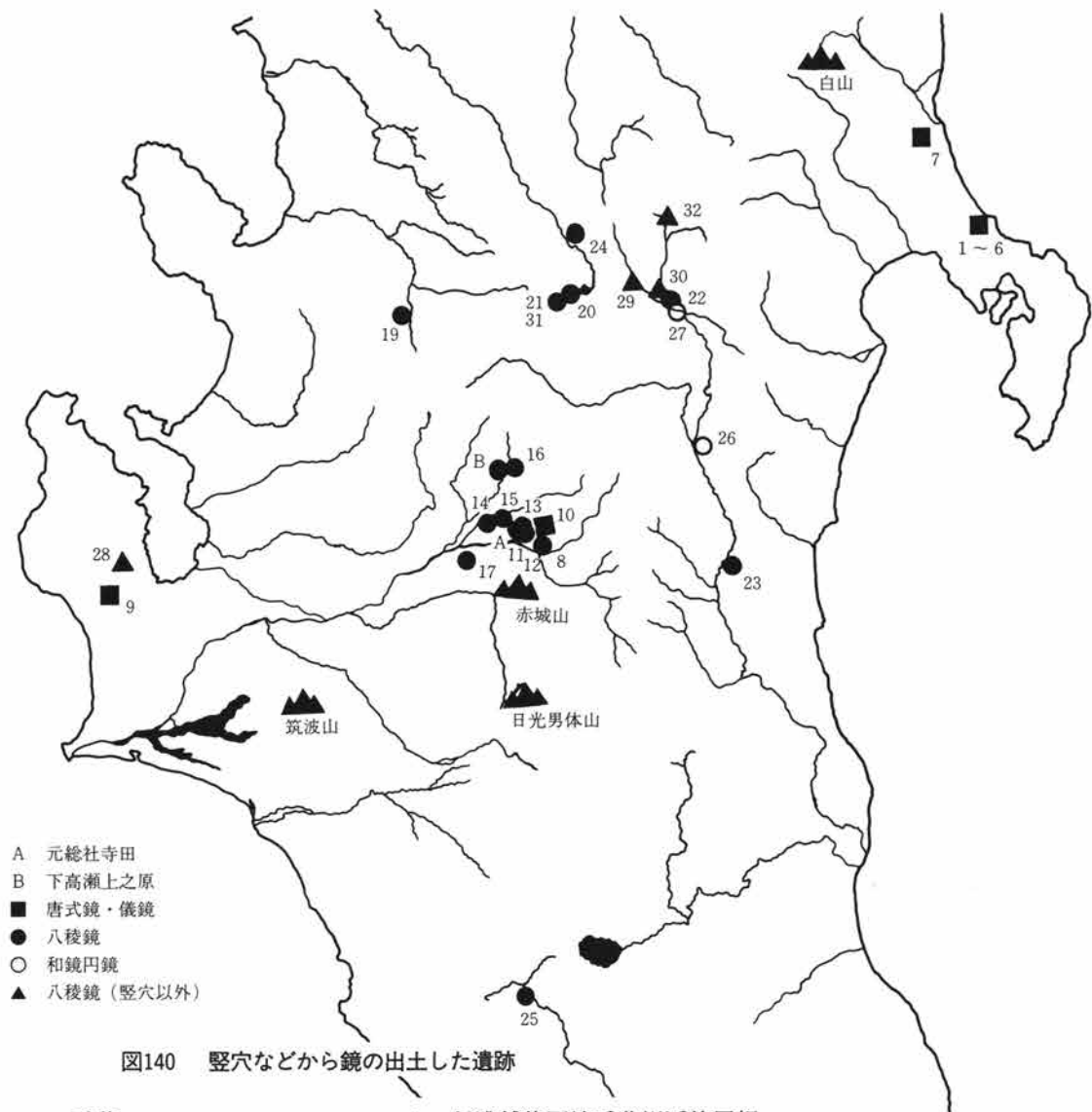


図140 竪穴などから鏡の出土した遺跡

- 乗落 : 信濃越後国境千曲川近傍尾根
金原 : 木曾御岳、信濃飛騨国境野麦峠近傍
(寺家)、(戸水C) : 日本海海港
- C 不明
文六第2 : 不明
- D 信仰自然対象 :

日光男体山山頂、赤城山小沼、白山山頂、(筑波山山頂)、(羽黒山鏡ヶ池)

Aは、大原第二がやや不明瞭だが、他は極めて条件が似ている。もちろん、有力神社のある場所は主要交通路の通る地点でもある。東山道本路と木曾路の分岐点近くでもある吉田川西の付近では、さらに1面瑞花双鳥文八稜鏡が出土していたと言う。

Bでは、寺家は渤海との交通に大きく関係ある海港であり、近くの戸水Cも同様の可能性が考えられ

る。馬場中路は、今のところ東山道の路線を含んだ阿武隈川の流路との関係でとらえたい。乗落については、調査者の桐原 健は、この遺跡の居住者を鍛冶的な仕事にも従事し、灰釉陶器を運んだ「自由な山の民」で、「荘園機構からは何ら制約を受けない自由な民である彼等が、運輸交通業者としても大きな役割を果たしたろうことは想像に難くない」と考え

た。(文献8)詳細は不明だが、金原も同様のあり方と思われ、群馬の神流川谷の伝世資料にも共通する。菊池の言う「鏡を祭祀に使う呪術的宗教者の存在」を桐原の「自由な山の民」と重ねて考えることは、可能である。しかし「有力者層の(中略)私的所有物としての化粧道具」としての八稜鏡の存在は、前述のように難しい。

以上をまとめれば、唐式鏡の段階で日本海交通の要地の寺家などで始まった竪穴への埋納儀礼が、律令制国家が崩壊した時に内陸の山岳信仰と結びつい

て八稜鏡の儀礼が生まれたと思われる。その受容については、「京の文化をいち早く受容することができた国庁・国分寺近辺の集落で始まり」、「山間部への波及も同時に行われた」とは考えにくい。むしろ、「山の民」が自らのそして東山道地域の多くの人々にとっての精神的基盤である山岳信仰のために使用・製作し、その信仰力の大きさに国庁周辺が引きづられたとする方が、理解しやすい。日光男体山山頂の膨大な量は、何よりもその現れである。

文献

- 1 石川県埋蔵文化財センター 1986A『寺家遺跡発掘報告Ⅰ』
- 2 1986B『金沢市戸水C遺跡』
- 3 1988『寺家遺跡発掘報告Ⅱ』
- 4 石橋一恵 1984「千葉市文六第2遺跡出土の銅鏡について」『加曽利貝塚博物館紀要』11
- 5 大阪市立博物館 1985『日本の古鏡—女装美のプロデューサー—』
- 6 尾崎喜左雄 1966「山と信仰」『群馬文化』87、1970『上野国の信仰と文化』尾崎先生著書刊行会に再掲
- 7 菊池誠一 1987「平安時代の集落出土鏡の性格—東日本の出土例を中心に」『物質文化』49
- 8 桐原 健 1968「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃』20—4
- 9 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『鳥羽遺跡G・H・I地区』
- 10 1988『書上上原之城遺跡ほか』
- 11 1990『鳥羽遺跡L・M・N・O地区』
- 12 群馬県立歴史博物館 1980『群馬の古鏡』
- 13 郡山市教育委員会 1983『郡山東部Ⅲ』
- 14 斎宮歴史博物館 1989『斎宮跡発掘資料選』
- 15 斎藤 忠ほか 1963「日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書」角川書店
- 16 坂井 隆 1989「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴」『研究紀要』6、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 渋川市教育委員会 1988『市内遺跡Ⅰ』
- 18 榛東村教育委員会 1987『別分八幡下遺跡 申府神田遺跡』
- 19 高崎市教育委員会 1981『正観寺遺跡群Ⅲ』
- 20 同上 1983『天田・川押遺跡』
- 21 田島桂男 1979『大類村史』
- 22 茅野市教育委員会 1983『構井・阿弥陀堂遺跡』
- 23 富岡市教育委員会 1981『本宿・郷土遺跡』
- 24 長岡京跡発掘調査研究所 1985『長岡京市文化財調査報告書』14
- 25 長野県教育委員会 1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3』
- 26 長野県埋蔵文化財センター 1989『吉田川西遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 27 1990A『南栗遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 28 1990B『北栗遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 29 長野市教育委員会 1975『浅川西条』
- 30 広瀬都巽 1974『和鏡の研究』角川書店
- 31 福井県立博物館 1986『古鏡の美 出土鏡を中心に』
- 32 福岡県教育委員会 1977『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3
- 33 福岡市教育委員会 1986『吉武飯森遺跡説明会パンフレット』
- 34 南安曇郡誌改定編集会 1983『南安曇郡誌』
- 35 箕輪町教育委員会 1978『大原第二・第三遺跡』
- 36 山梨県教育委員会 1987『二之宮遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告23
- 37 読売新聞 1991「大阪版12.12」『月刊文化財発掘出土情報』1992—2